

長野県革新懇ニュース

2014年11月号
(発行日11月10日)
年会費5000円(送料込)
振替 0510-3-15971

186

発行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人: 山口光昭 編集長: 高村裕
〒380-8790 長野市県町593 高校教育会館内
TEL: 026-234-1231 FAX: 026-234-2219 メール: yamaguti@trust.ocn.ne.jp

革新懇の3つの共同目標

- ①日本の経済を国民本位に転換し、暮らしが豊かになる日本をめざします。
- ②日本国憲法を生かし、自由と人権、民主主義が発展する日本をめざします。
- ③日米安保条約をなくし、非核・非同盟・中立の平和な日本をめざします。



1956年、旧上高井郡東村生まれ。1994年～長野電鉄労働組合教育宣伝部長、1998年～同書記長(～組合専従)、2002年～同執行委員長、連合長野須高地域協議会議長(統合に伴い、現在は高水地域協議会議長)、2003年～須高地区労働者福祉協議会会長

地域に根ざす労働運動が 求められている

小林君男さん

(連合長野・高水地協議長)

青年団活動がきっかけ

◇労働運動に関わった経緯は高校卒業後、長野電鉄に就職しましたが、その頃は地域の青年団運動が活発で、やってみないかと誘われ、自然に活動に係わるようになりました。その成り行きで、単位青年団や市連合青年団の役員を引き受けるようになりました。市連合青年団の事務所に青年団活動を集めた「学習の友」という雑誌が無造作に置かれていて、自然に目を通し興味があき、職場の先輩に話したら、すぐに購読するようになってしまいました。この事から多くのことを学び、世の中の仕組みが徐々にわかるようになっていきました。丁度その頃、分裂していた

長電の労働組合が統一した間際で、各職場でも組合活動の機運が高まっていて、自分自身も「友」の購読もあり労働組合活動にも関心を持つようになっていました。また、青年団の先輩から勧められてその頃読んだ高田求さんの「明日へのノート」には深い感銘を受け、貧困家庭で育った幼年期の思い出と社会の仕組みが痛烈に重なり合っただけで、人生観が大きく変わりました。青年団では機関紙づくりなどにも携わったので、そうした文献が大切に扱われていた。長電では1966年に組合が分裂し、長野組合と須高組合という名称の二つの組合が存在しました。当時長野組合は1500人で、須高組合は1000人程度。長野組合は多数でしたが、所謂第2組合で労使協調路線でした。須高組合は第1組合で少数派。当然会社から熾烈な攻撃を受け、きびしいたたかいは余儀なくされていきました。長野の権堂駅前で不当労働行為に抗議する「団結小屋」というピケを張った時期もありました。しかし、長野組合の中から会社を迎合する組合は頼りにならないうという声次第に強まり、統一の機運も高まり、春闘などでの統一闘争が常態化する中で、1976年に分裂を克服し統一に到達したわけ

です。そうした成果があったから、労働組合がしっかりしなければいけない、団結が大切だという思いが組合員の中に浸透していったわけでは。私は1975年入社ですが、これからの10年間の分裂を知らなかったわけですが、「団結小屋のうた」や「団結小屋のあと」という分裂から統一の過程の文献と接したことから、先輩にも誘われ青年部の書記長に立候補し、それ以来成り行きで、ずっと組合活動を続けることになってしまいました。

主張すべきは主張する

◇労働運動の現状については今、長電労組の委員長をしていただきますが、この須高地域では連合長野の地域協議会の議長は長電の委員長が兼ねることが慣例みたいになっていましたので、自動的に連合のポストに就いているわけです。連合の会議に行つて驚くのは、今の労組役員は県評を知らないんです。結構年配の役員でも、いろいろな問題はあっても県評の存在は長野県の労働運動では大きかったわけですから、少なくとも役員はその存在を知らなくてはならないと思うのですが、それだけ労働運動の存在が希薄になってきてしまった。社会的にも組織率が18%と言われており、こういう状況を直視するなら、連合だ、労連だと争っている状況ではないし、上部団体の指示に無批判に従っているべきではない。連合も以前、中坊さんなどに

憲法、大変な危機意識

◇地域でも旺盛に活動されていますが、集团的自衛権の行使容認や秘密保護法など憲法に係わるこのところの動きについては大変な危機意識をもっています。その点については皆さんとまったく同じ立場です。以前から自分としてできることはやるうと思ひ、長らく須高地域の9条の会の事務局を引き受けています。この地域で

コラム

信濃毎日新聞前主筆・中馬清福さんが逝去された。今日のマスコミ・言論界を代表する巨星であった。平和と自由、正義と人権で健筆をふるった人だけに断腸の思いである。氏は朝日新聞の専務を経て2005年4月、信濃毎日新聞の主筆に就任。爾来9年間、大型コラム「考」を執筆し続けた。その筆さばきは、日本国憲法の国民主権と平和主義に立脚し、安倍政権の改憲(壊憲)策動に真正面から対峙し立憲主義を貫いた。コラム「考」は224回を刻み、氏のわかりやすく冴えた論調と合わせ、読者とともに思考しながら歩む姿勢は、多くの県民の共感を呼んだ。▼中馬さんは紙面で健筆をふるうだけでなく、県下各地の講演にも労を惜しまなかった。13年3月、革新懇総会の記念講演を快く引き受けてくれ、国政選挙で護憲勢力の「救国戦線」を熱く語った。▼初めて中馬さんと会ったのは、11年12月の品川正治・辻井喬・中馬清福の3氏による「夢のビッグ鼎談」の時。憲法を、震災を、原発を、心を込めこもも語った。しかし、お三方とも鬼籍に入られ、今はもういない。戦争か平和か、今一番大事な時に、大切な方々を失った。その遺志を、今生きる者が決意を込め受け継ぎ発展させようではないか。

【2面に続く】

【Y】